数分前に通った道から一間と離れないところだっただけに、恐ろしさにふるえ安堵の胸をなぜ(ママ)おろした事もあった。

（土小学校『八十年誌』）

児童と女性

教員の増加　表194は尋常・高等科を合わせた柏校の教員数である。昭和一二年まで男性教員と女性教員の割合はおおよそ二対一で推移していたが、一四年から男性教員数が減少する一方、女性の割合が増加し、二〇年には一対三にまで逆転してしまった。男性教員が次々に召集され、その代わりを女性教員が埋めていった結果である。また一二年には代用教員が一人いるだけで残りは全て正教員であったが、後任の補充は准訓導・助教によって補わざるを得ず、一九年には准訓導七人、助教四人を数えている。

現在でいえば教育研究会とでもいうべき「相互視察」は、以前から教科ごとに東葛飾郡教育会東部班を単位に行われていたが、一八年になると増加した新任の女性教員の教育力向上が課題になったのであろうか、女性教員だけの研究会が催されるようになる。同年九月二五日に布佐国民学校において「女教員研究会」が開催され、富勢校の女性教員全員が出席する。一九年七月一二日に手賀校・風早校、一八日には富勢校において「相互査察」「批評会」が持たれ、女性教員が参加した。

一一月二二日にも午前に湖北国民学校、午後に手賀国民学校において「女教員相互査察」が行われる予定であった。午前の行

表194　柏校の教員数
（昭和7～21年）
単位：人

	男	女	合計
7年	15	7	22
8年	13	8	21
9年	15	10	25
10年	15	10	25
11年	17	9	26
12年	18	9	27
13年	18	10	28
14年	17	11	28
15年	14	13	27
16年	13	17	30
17年	12	20	32
18年	8	22	30
19年	9	22	31
20年	8	23	31
21年	13	24	37

出典：表188に同じ。

緑国民学校の疎開児童（昭和20年３月　川村一夫氏所蔵）

事が終わって手賀校に行くため、伝馬船二隻と笹葉船一隻を縄と鎖で連結し、船頭二人が操って手賀沼を渡る途中、風波のために浸水し、三隻とも沈没してしまった。三隻には校長も含めて四四人の教師が乗っていたが、うち一八人が水死するという痛ましい事故が発生した。富勢校では訓導蓮沼永子と菅井トクの二人が水死するという事態になった。

柏校と土校の児童数を示した前掲表188、189を振り返って見よう。柏校の場合、児童数の増加は途中入学者の増加はあるが、それよりも新入生の増加によっている部分が大きかった。しかし、一七年頃から明らかに途中入学者が増加し、また新入生も一八年を除くと顕著な増加を示す。さらに二〇年には初等科のみで四〇〇人、二一年には二〇〇人の増加を見るが、それは新入生の顕著な増加と全学年にわたる途中入学者の激増の双方によるものである。土校においては一七年まで目だった変化はないが、一八年になると新入生の増加と各学年にわたる増加が見られ、二〇年には新入生が一〇人減少しながら、在校生は七五人も増加する。

戦局が悪化し始めてから顕著になる、初等科・高等科を通じる児童数の増加は、いうまでもなく東京などから